禅僧の墨蹟～臨済宗・曹洞宗・黄檗宗～

禅宗は中国から伝えられた仏教の一派であり、現在日本には臨済宗・曹洞宗・黄檗宗の３つの禅宗が伝えられている。駒澤大学はその内のひとつ曹洞宗僧侶の学問所を起源とする大学である。

鎌倉時代に宋に渡った栄西（1141～1215）が臨済禅を、道元（1200～1253）が曹洞禅を伝え、江戸時代になって隠元（1592～1673）が黄檗禅を伝えた。各宗派で独特の展開を遂げながら現在に至っている。

今回、当館が所蔵する墨蹟コレクションの中から、臨済宗の白隠、曹洞宗の月舟、黄檗宗の隠元の墨蹟を紹介する。彼らは江戸時代に活躍した、それぞれの宗派を代表する傑出した禅僧であり、その墨蹟は現在も高い評価を受けている。

白隠慧鶴（1685～1768）

臨済宗

【宗派メモ】臨済宗の開祖は栄西と教科書等には記されているが、栄西が伝えたのは臨済宗黄龍派という一派である。それが最初に伝えられた臨済宗という意味で、その流れは建仁寺（京都市）に伝えられた。のち円爾弁円が伝えた臨済宗楊岐派が主流となり、臨済禅は鎌倉武士に受容された。蘭渓道隆・無学祖元によって鎌倉に建長寺や円覚寺が開かれると、京都五山・鎌倉五山の基礎が整えられ、室町期には将軍家や大名家の支持のもと、五山文化の隆盛に至った。

多彩な書画を数多く残し、その数は一万を超えるともいわれる。ウィットに富んだ内容で、一般に対して平易に禅の要旨を説いた。白隠の真価は書画だけにとどまらない。名誉・利益・出世を望まず、民衆を教化するとともに、すぐれた後進を育成し、当時衰退傾向にあった臨済宗を復興に尽力した。「臨済宗中興の祖」と讃えられている。

「尊　行持有らん一日は…」白隠慧鶴筆

紙本墨書／本紙縦 32.0 ㎝ × 横 56.5 ㎝／江戸時代（18 世紀）／当館蔵

白隠独特の薄墨による書法で「尊」と大書し、「行持（ぎょうじ）有らん一日は尊ぶべきの一日なり　行持無からん百年は恨むべきの百年なり」と記す。

行持とは、仏道の修行を怠らず、護持・持続すること。道元は『正法眼蔵』（しょうぼうげんぞう）行持の巻の中で、行持なしに百歳生きることの無益さと、たった一日の行持を重んじ命を大切にする尊さを説いている。行持巻の言葉を要約し、白隠らしく平易に禅を説く姿勢が感じられる。

行持は主に曹洞宗で用いられる言葉だが、宗派を超えて広く説かれていたことをうかがわせる。

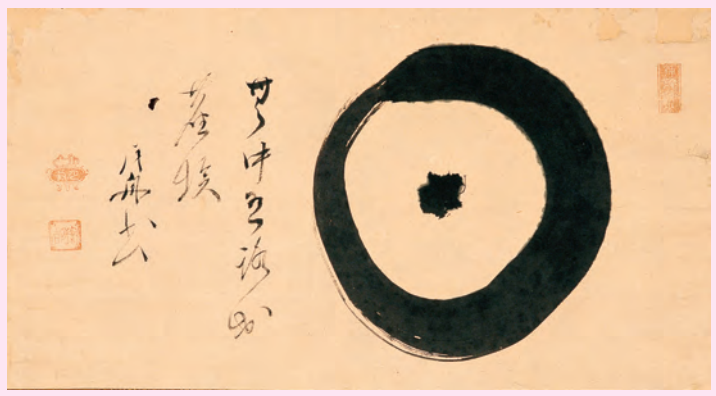
月舟宗胡（1618～1696）

曹洞宗

【宗派メモ】道元ははじめ建仁寺で栄西の禅を学んだ。宋に渡ると諸方をめぐり、ついに天童山（浙江省）の如浄のもとで曹洞禅の仏法を継いだ。帰国後は深草（京都市）に興聖寺を開き、やがて永平寺を開創した。道元から四代のちの瑩山は總持寺を開き、瑩山およびその門弟たちの積極的な民衆教化により、地方の中小武士や土豪層に浸透し、曹洞宗は飛躍的に全国的発展を遂げた。道元と瑩山は「両祖」、永平寺と總持寺は「両本山」として並び称されている。

書に長じ、遺墨の数は曹洞宗でも随一の数を誇るといわれている。

加賀（石川県）の名刹大乗寺などの住持を務める。古規復興を掲げ、道元・瑩山の時代の教え・行法に立ち返ることを目指した。一方で、当時最先端であった黄檗禅の規則を導入するなど、時代に即した行法を実践した。



円相（えんそう）　月舟宗胡筆

紙本墨書／本紙縦 31.5 ㎝ × 横 58.2 ㎝／江戸時代（17 世紀）／当館蔵

円相は禅の心髄を示す手段の一つとして描かれ、悟りそのものを円形で示す。生きとし生ける全てが、平穏で欠けるところのない円満な状態にあることを表わす。

円相に続く語は「無中有路出塵埃」（無中（むちゅう）に路（みち）有り、塵埃（じんあい）を出ず）。「無」は、有無を超越した絶対の「無」を指し、「塵埃」は人間の迷いや妄想を塵（ちり）や埃（ほこり）に例えた語。禅の世界に入った者は、物事への執着を離れ、何事も無心でできるようになる。それが悟りであり道であることを表している。

円相は単に円形を描くものが一般的だが、「円」の字を大書したものや、本円相のように円の中に点を打ったものもしばしば見られる。

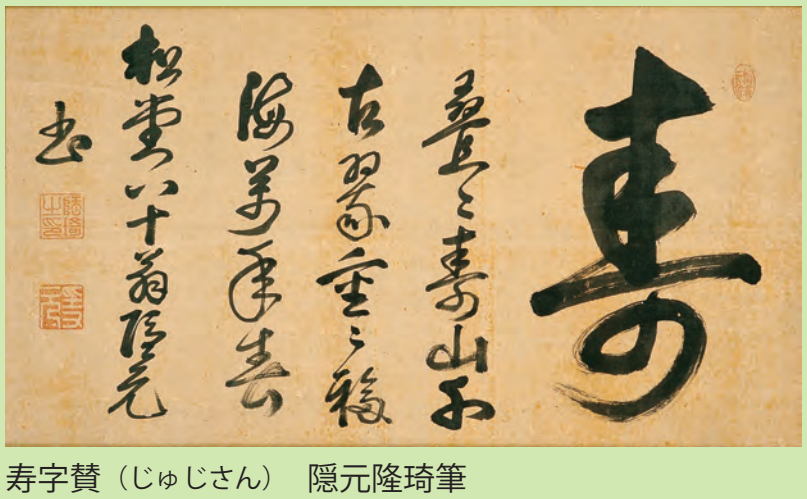
隠元隆琦（1592～1673）

黄檗宗

【宗派メモ】黄檗宗というのは、明治時代になって一派として独立した以降の名称であり、もともとは黄檗禅または臨済宗黄檗派と称する臨済宗の一派であった。江戸時代初頭、明末清初の混乱を避け、多くの禅僧が日本に渡来した。彼らの禅は「明朝禅」と呼ばれ、明代の禅宗儀礼や建築様式を通じて、日本禅宗界に大きな刺激を与え、活性化を促した。また文化面においても、中国風の書や煎茶道・普茶料理などの文化を日本にもたらし、新たな禅文化が展開した。

中国福清（福建省）の出身。承応３(1654) 年、63 歳の時、先に渡来していた門弟の逸然性融（いつねんしょうゆう）の招請を受け来日した。

万治元（1658）年、将軍徳川家綱との謁見に至り、将軍を檀越として幕府より宇治（京都府宇治市）に寺地を拝領した。この寺は寛文元（1661）年、黄檗山万福寺として成立、日本禅宗に新たに黄檗の一派を開いた。



寿

疊々寿山千古翠
重々福海万年春
松堂八十翁隠元書

寿字賛（じゅじさん）　隠元隆琦筆

紙本墨書／本紙縦 48.5 ㎝ × 横 88.2 ㎝／寛文 11(1671) 年／当館蔵

寛文 11(1671) 年、隠元が 80 歳を祝して書したもの。「寿」と大書し、七言の対句を記す。「松堂」は、隠元が退隠した万福寺内の松隠堂を指す。

隠元の書は中国明代の書風として尊重され、弟子の木庵（もくあん）・即非（そくひ）とともに「黄檗三筆」と並び称され、高い評価を得ている。

「インゲン豆」は隠元が中国から持ってきたことに由来するといわれている。